

令和3年度日本語教育能力検定試験 合格体験記

日本文学科4年 熊谷未来

1. 受験したきっかけ

私は、大学入学時点で「大学で新しいことにチャレンジする」「大学卒業後もいかせるものを習得する」という目標がありました。その後大学2年で出会った日本語教育に関心を持ったことをきっかけに検定のことを知り、目標にもある「大学卒業後もいかせる」という点から日本語教育能力試験への挑戦を決めました。

2. 合格までの道のり

2-1 1年間の独学と1回目の挑戦（大学3年生）

当時本学の学部生は、多くが4年生で検定試験を受験していました。しかし日本語教育能力検定自体全国的にも毎年2割前後の合格率で難易度が高く、専門的な内容で範囲も幅広いため、本学の学部生での合格者はいませんでした。そのため私は、年1回の試験に参加するチャンスを少しでも増やそうと3年生での受験を決め、他の教科の課題・授業の復習などと並行しながら自分で参考書を買って独学を始めました。しかし独学では、ぶ厚い参考書の内容を一通り触れて、用語の意味を覚えることで精一杯でした。実際、検定では用語の知識があることを前提にした応用問題が出されるため、検定対策としては不十分なまま無理やり知識を詰め込んで挑みました。結果はやはり不合格で、当日は時間も足りず未回答の部分もたくさんあり散々な結果でした。

2-2. 2度目の挑戦（大学4年生）

不合格の結果が出てから、一度は諦めようかとも思いました。検定の費用も安くはない上に、検定の内容が難しく合格できる自信が無かったからです。しかし、1年目の自分の学習方法では不十分だったという自覚があり、改善して続ければもっといい結果になることはわかっていました。その上、大学在学中に合格するという目標達成にはチャンスがもう一度あったため、再度受験すると決めるのに時間はかかりませんでした。悔しい気持ちが残っているうちに試験の解答解説を確認し、1年間の学習を振り返ることから2年目の検定対策をスタートしました。今振り返ると、2回目挑戦すると決めたタイミングで内省をして、学習方法から見直したことが合格に繋がる大きな一歩だったなと思います。（どう変えたのかは次の「**3.私の検定試験対策<2年間の大まかな学習記録>**」で述べています。）そのため、実質2年かけて検定に合格したことになりますが、同じ内容を学習していても検定対策に飽きを感じたことはありませんでした。むしろ2年目の方が、内容をわかりやすく噛み砕きながら再確認でき、詰め込んでいた知識がより応用的で実践の現場を想定したものになっていきました。1年目の独学で得た知識が土台としてあってくれたことで、2年目には全

く違うアプローチでより効果的に知識を深められたのだと思っています。

3. 私の検定試験対策 <2年間の大まかな学習記録>

3-1. 不合格と合格両方を経験して感じた、取り組み方の違い

ーインプット重視の1年目「貯蓄の1年」とアウトプット重視2年目ー

1年目は検定試験についてわからない部分も多く、検定自体の対策というよりは日本語教育分野の知識のインプットを重視していました。参考書を常に持ち歩いて、空きコマの時間などを使って覚えたい部分をノートに書き取りながら、参考書の練習問題を解くのが基本的な学習方法でした。最初は知識を頭に入れることで精一杯だったこともあり、ノートの枚数が増えていく反面、本当にこれが頭に入っているのか不安でした。

2年目は方法を変えて、1年目に覚えたことを思い出す作業と用語どうしの関連付けに力を入れました。具体的には「自作の用語集」を作り、過去問で間違えた問題の解説・過去問や用語集でわからなかった用語を全てメモするようにしました。そうすることで、自分の苦手を把握でき対策がしやすくなりました。空き時間が少しでもできたら、すぐに自作の用語集を見返して知識を維持できるように努力していました。また、日本語教育の授業で自分が学習していた用語などが出てきたら、プリントに自分が覚えていることを思い出しながら書き込んでいました。板書に加えて、授業で触れた用語と比較・列挙される用語などの周辺知識をメモし、レポートなどでもなるべく覚えた用語を使うようにしていました。ただ目で覚えるのと、実際に文章や会話の中で説明しながら用語を使用するのでは後者の方が圧倒的に頭を使うと思います。すでに覚えていた用語でも、一歩深い知識が付け加えられると自分の思っていた意味合いとは全然違うことに気づくこともありました。聞いたことがあるかどうかよりも、しっかり説明できるかまで掘り下げるのが大事だと思います。

1年目はわからないことばかりでしたが、2年目からは用語をどんどん使い自分の理解が深まってきていることを実感しながら、知らないことを知る楽しさの方が大きくなっていったような気がします。

3-2. 試験対策のアドバイス

ここでは、私が「これはしておいてよかった」と思うことを<合格するためのポイント>としてまとめました。それに加えて、**試験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲそれぞれの大まかな対策と、試験を挑む上での注意**もいくつか挙げてみました。特に試験の内容に関する部分は実際に問題を解いてみないとわからない部分も多いため、過去問を解き始めた時に再度確認できるようにしておくと思います。

<私が思う合格のポイント5つ>

① 参考書をすぐ買って全体の内容を確認した

受験すると決めて私はすぐ参考書を買いました。ぱっと見て衝撃的だったのは、出題範

囲がとてつもなく広いことと、音声の聞き取り問題の中で口のなかの図を判別する問題があることでした。まずはどんなことをするのか1度目にしてみることで、②に繋げやすくなると思います。

② 合格への道のりを自分の尺度で逆算した

「自分の尺度で」というのは、参考書で目安として提示しされている学習の計画などはあくまで参考であり、そこに無理に合わせる必要はないということです。私の場合、1回目受験を決めた時点で検定の出題範囲の知識が全く足りなかったため、大学4年ではなく3年から自分で検定対策を始めました。さらに私は、合格まで1年間で網羅する計画で組まれた参考書を結局2年間かけ熟読しました。なぜなら、早く取りかかった分記憶を保持するのが大変で、参考書を何度も読み返していたからです。また試験Ⅲにある作文問題は知識をフル活用して答える問題であるため、試験対策の中では基本的に最後のまとめとして、検定直前に短期間で対策を行います。しかし私は2回目受験を決めてすぐ作文の練習に取り掛かり出題傾向を掴むとともに、作文問題を使ってある場面と考えられる対応との組み合わせを覚えたり用語どうしの関係性を掴む練習をしていました。①でも言っているように、どんな問題が出るのか、それらを解くためにはどんな知識が自分には足りないのか明白にしてから、穴埋めするためにどんな勉強をすればいいのか逆算するのが大切だと思います。

③ 目標は高く持つ

実際には実現はできませんでしたが、私はもともと3年生で一発合格することを目指していました。そのため2年目挑戦する際には、1年目に一生懸命覚えた用語の知識が役立ちました。しかし、最初から2年目に(4年生で)合格することを目標にしていたら、1年目は今より用語の知識が不足していたかもしれませぬし、1年目(3年生)の段階では受験していなかったかもしれませぬ。④にもあるように、3年生の段階で一度受験していたことで、受験日当日のイメージや準備をしっかりとすることができました。

④ 1年目の不合格(受験経験)

受験経験があると、当日の動きや受験までの対策の質も大きく変わります。日本語教育検定試験は、当日ほぼ丸1日かけて試験を受けます。集中力を維持するための対策や当日の過ごし方、日本語教育能力検定試験特有の問題(試験Ⅱの音声試験Ⅲの最後の作文)を受ける時の時間配分など、知っていることで2回目うまく対応できた部分が多かったです。

⑤ 自作の用語集の作成で苦手を把握 的を絞った内容の濃い学習

2年目で合格できた大きな理由はここにあると思います。検定は出題範囲が広いため、範囲を全て学習した後はなるべく自分が苦手なところに的を絞る必要があります。作り込めば作り込むほど苦手な用語をコレクションするような感覚になって、過去問を解いて用語集に追記するのが本当に楽しかったです。もちろん試験当日持参した自作の用語集は、短時間で自分の苦手を再確認できる唯一無二のものであり、自分にとってどの参考書よりも一番心強かったです。

試験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲそれぞれの大きな対策と、試験を挑む上での注意

試験Ⅰ

Ⅰでは用語自体の意味を問うのではなく、その用語の性質を持つ選択肢を選ばせる問題が多いです。そのため、用語を覚えたらどんなものか実際の例に多く触れ覚えておくことが大切だと思います。また、私が試験Ⅰを過去問で解いていて頭を抱えていたのは、1つの用語に複数の呼び方があるものがよく出題されることです。覚えているのがどっちか片方だけだと、用語自体知っているのに気づけないことがあります。また参考書によって用語自体の呼び方が異なる場合があるので、いろんな参考書・用語集を使うとよりいいと思います。例えば、比喩表現の種類である「隠喩」・「換喩」・「提喩」にはそれぞれ、「メタファー」・「メトニミー」・「シネクドキ」という呼び方があります。また、Ⅰは特に知識を問われる範囲が幅広く、どの過去問をやっても必ず聞いたことのない用語が出てきます。そのため全部正解するのを目的とするよりも、自分が知っている部分は絶対に外さないようにするのが大事だと思います。

試験Ⅱ

音声の聞き取り・判別と発音の際の口の使い方を見分ける問題は、多く問題を解くのが一番の対策だと思います。最初は混乱するかもしれませんが、自分で回答や解説を見ながら分析して判別方法をつかんでしまえば攻略できると思います。実際に音声の部分は私自身も試験当日満点に近い点数を取れた自信があります。点数を取るならここです！

試験Ⅲ

試験Ⅲでは最後の作文も含め実践的な内容になっていて、用語を知っていること前提で現場での対応を問われます。そのため、提示された状況でどんな対応が考えられるのか、どんな選択肢がありそれぞれどんな違いがあるのかなど、できるだけたくさんの周辺知識を引き出せるようにするのが大切です。試験Ⅲの対策として、私は単語どうし関連づけて覚えるように意識していました。

1つの用語から他の用語を引き出す方法（芋づる式）で覚える

このことを何という→Aという→Aの他にどんな～があるか→Bがある→AとBの違いは？

作文に関しては採点が審査員次第なので、内容の良し悪しにこだわるよりもまずは「問われていることは何で、その回答ができているか」「文章全体の構成が整っているか」などに注意し指定の次数の文章を書き慣れておくようにしておくのが大事だと思います。

おわりに

実は検定に向けて必死に独学をしていた時、日本文学科の生徒向けに作成される「日文会だより」で教員採用試験に合格した先輩の合格体験記を読んで、私もこの大学で何か成し遂げ後輩に向けて役立つものを残したいと思っていました。そのため形は少し違いますが、今こうして「合格体験記」を残せることをとても嬉しく思います。私のこの合格体験記が後輩たちの背中を少しでも後押しできることを願っています。

最後に、日本語教育を通じてたくさんのことを教えてくださった澤邊先生、勉強会で貴重な経験と知識を教えてくださった志賀村先生に心から感謝申し上げます。